

# 甲府城跡山手御門

— 甲府市歴史公園山手御門埋蔵文化財の試掘調査・発掘調査・整備報告書 —

2010

甲府市教育委員会

## 例　　言

- 1 本書は、山梨県甲府市市丸の内一丁目、北口二丁目所在の甲府城山手御門一帯における試掘・発掘調査及び山手御門（歴史公園）の復元整備報告書である。
- 2 本調査は、新都市拠点整備事業 30 街区における開発に先立ち、文化庁、山梨県教育委員会の指導のもと、甲府市教育委員会が発掘調査を実施した。
- 3 第 1・2 次調査は、国と県の補助金の交付を受けた。
- 4 発掘調査の期間、面積、担当者は次のとおりである。

第 1 次調査 平成 9 年 6 月 2 日～4 日、6 月 16 日～8 月 31 日 560 m<sup>2</sup>  
志村憲一、伊藤正彦（遺構の有無と残存状況を確認する試掘調査）

第 2 次調査 平成 10 年 10 月 9 日～平成 11 年 1 月 8 日 1,285 m<sup>2</sup>  
志村憲一（清水曲輪、山手御門土橋等の全容を確認する試掘調査）

第 3 次調査 平成 17 年 9 月 14 日～11 月 16 日 3,000 m<sup>2</sup>  
平塚洋一（復元整備のための事前発掘調査）

- 5 復元整備工事は、甲府市都市建設部新都市拠点整備課、甲府市教育委員会文化振興課、（株）文化財保存計画協会を事務局とし、甲府駅北口・歴史公園整備事業検討委員会の意見を集約して復元した。本工事の発注は、甲府市都市建設部新都市拠点整備課が実施した。
- 6 甲府城山手御門には 2 箇所の門があり、過去の表記も山ノ手門、山之手門、山手門等とさまざまな記載が用いられている。それぞれの門を区別するため、外側の袖石垣に取り付く高麗門を「山手門」（ヤマノテモン）、内側の石垣に渡る二階建の櫓門を「山手渡櫓門」（ヤマノテワタリヤグラモン）、両者を含む虎口空間も含めた総称を「山手御門」（ヤマノテゴモン）として呼称の統一をした。
- 7 本書にかかる出土品、記録類は甲府市教育委員会で保管している。
- 8 本書は、第 2・4 章：望月祐仁、第 3 章（第 3 節 以外）：志村憲一、第 1 章・第 3 章 3 節：平塚洋一が分担して執筆し、望月祐仁・志村憲一が編集した。
- 9 本書刊行に係る整理作業（実測・図化・編集・校正等）は、内藤真千子・上島光子が行った。
- 10 試掘調査から報告書作成に至るまで、文化庁、山梨県教育委員会学術文化財課、山梨県埋蔵文化財センター、（財）山梨文化財研究所、甲府市文化財調査審議会、柳沢文庫、文化財保存計画協会の指導、ご教示、資料提供を賜った。記して感謝する次第である。

## 凡　　例

- 1 本書の報告内容については、甲府城で一般的に用いられている清水曲輪と山手御門及び一帯の各遺構の名称を付した。
- 2 各遺構図のスケールは図版ごとに表示するとともに、同じ図面内の全体図（1000 分の 1）にその位置を矢印で示した。遺物実測図の縮尺は、図面上に表示したスケールのとおりである。
- 3 掲載されている図版などのスケール、方位、スクリーントーンの用例は、必要に応じて図面上に示した。
- 4 遺物番号は掲載順に付した番号であり、所属時期や出土状況を示すものではない。

## 目 次

例言・凡例

目次

第1章 地理的・歴史的環境	1
第2章 甲府城山手御門（歴史公園）整備経過	3
第3章 山手御門試掘調査	
第1節 山手御門調査概要	4
第2節 清水曲輪東面石垣	4
第3節 清水曲輪北面石垣	5
第4節 土橋石垣	6
第5節 土橋北東側対岸石垣	6
第4章 山手御門（歴史公園）復元整備工事	
第1節 事業の体制	17
第2節 整備基本方針	17
第3節 復元の基準	17
第4節 山手門の復元	18
第5節 山手渡櫓門の復元	18
第6節 土壠の復元	19
第7節 虎口と石垣の復元	19
第8節 一般開放	19

報告書抄録・奥付

図版目次

図 1 甲府城下町遺跡主要調査地点	2
図 2 清水曲輪東面石垣側面図	7, 8
図 3 清水曲輪北面石垣平面図、側面図、断面図	9, 10
図 4 山手門東 清水曲輪石垣：土橋東面石垣平面図、側面図	11
図 5 土橋西面石垣側面図	12
図 6 土橋北東側堀対岸石垣平面図、側面図	13
図 7 出土遺物（1）	14
図 8 出土遺物（2）	15
図 9 山手御門配置図	20
図 1 0 山手門・脇土壠平面図、立面図、断面図	21
図 1 1 山手渡櫓門立面図、断面図	22
図 1 2 山手渡櫓門1階・2階平面図	23
図 1 3 山手御門土壠平面図、立面図、断面図	24
図 1 4 甲府城内絵図「楽只堂年録」第173巻（山手御門部分）	24
写真 1 検出遺構	25
写真 2 出土遺物	26
写真 3 整備状況（1）	27
写真 4 整備状況（2）	28
観察表 出土遺物観察表	16

## 第1章 地理的・歴史的環境

甲府盆地は山梨県のほぼ中央に位置する一辺が約20kmの逆三角形を呈する。甲府城は盆地北縁に形成された相川扇状地のなかの独立丘に立地する。

甲府城跡周辺の発掘調査では、縄文時代や古墳時代の土器が出土しているが、城下町創設及び近代以降の開発により、中世以前の土地利用は不明な点が多い。

中世以前から一帯は一条荘と称され、鎌倉幕府の成立に貢献しながらも源頼朝に謀殺された一条忠頼の屋敷があったとされる。忠頼の菩提を弔うため夫人が屋敷内に尼寺を建立し、後に一条時信が時宗二世の他阿真教に帰依して、その尼寺を時宗に改め一蓮寺とした。

武田信虎に開創された甲府は、甲府城跡から約2.5km北側に築かれた躑躅ヶ崎館が統治の拠点であったが、大永4年(1524)には現天守台付近に一条小山の砦が築かれ、さらに甲府駅一帯まで中世城下町の南端であったものと推定される。

天正10年(1582)3月、織田信長・徳川家康による甲斐侵攻を受け、天目山(現甲州市)で、武田勝頼は自刃し武田氏は滅亡した。織田信長は家臣の河尻秀隆に甲斐を支配させた。しかし、同年6月本能寺の変により信長が倒れると、秀隆も一揆によって殺害され、甲斐は無主空白となった。そこへ徳川家康と北条氏とが甲斐・信濃をめぐって攻防する。最終的には北条氏と講和を結び、徳川家康は関東移封となるまでの8年間、城代に平岩親吉を置き甲斐を支配した。この頃一条小山の地に着目し、甲府城の縄張りに着手したとされるものの確証はない。

天正18年、徳川家康は豊臣秀吉により江戸を中心とした関八州に移封され、羽柴秀勝が甲斐を支配した。だが在任期間は半年ときわめて短期間で岐阜城に移った。羽柴秀勝移封後は、加藤光泰が天正19年から文禄2年(1593)まで支配した。家康支配圏との国境に位置する城としての意識が強く、甲府城の築城を強力に推し進めていたものと考えられる。しかし、朝鮮出兵に出席しそのまま陣中で没することとなる。

加藤光泰の後、文禄2年から慶長5年(1600)までの約7年間、浅野長政・幸長父子が甲斐を支配した。発掘調査では浅野家の「丸に違い鷹の羽」紋をあしらった軒丸瓦が多数出土したことから、この時代に建物がほぼ完成したと思われる。

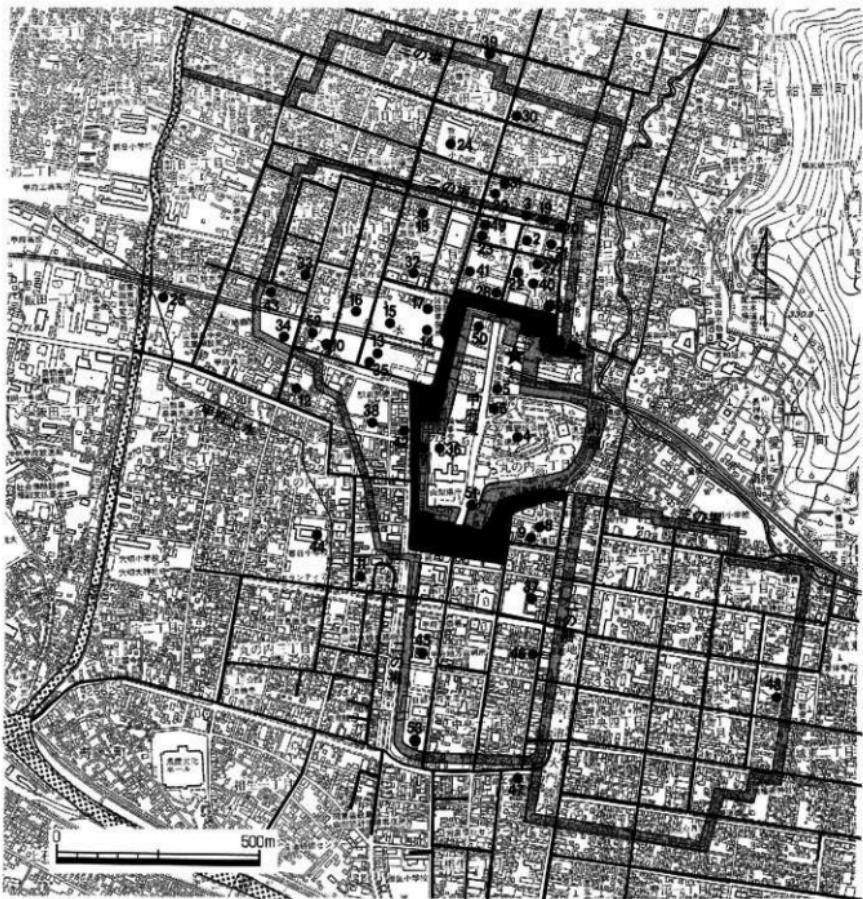
関ヶ原の合戦以降は徳川家康が甲斐を再度支配し、平岩親吉が城代になる。慶長8年に家康九男の徳川義直が甲斐に封ぜられるが、平岩がそのまま城代として執政した。慶長12年義直が尾張藩主に転すると平岩は附家老として大山城主となった。

その後は幕府直轄となり、武川十二騎が城番を勤めた。元和4年(1618)から寛永9年(1632)までの13年間、二代将軍徳川秀忠の三男徳川忠長が甲斐を支配した。忠長は駿府城に居住し、武川十二騎が引き続き実務を行った。忠長改易後は寛永10年から寛文元年(1661)までは城番制となつた。

寛文元年～宝永元年(1704)、三代將軍家光の三男徳川綱重、その子綱豊と領有し甲府藩が成立した。綱重・綱豊は江戸に在府したまま治世をした。綱豊はその後五代將軍綱吉の養嗣子となり、後の六代將軍家宣となる。

宝永元年、五代將軍綱吉の側用人柳沢吉保、その子吉里が甲府藩主となる。吉保は江戸に在住したままだったが、吉里は甲府城に在城した。柳沢家のものとて城内だけでなく城下町も大きく整備され、江戸時代を通して最も賑わつたとされる。享保9年(1724)吉里の転封後は再び幕府の直轄となり、江戸時代末まで甲府勤番により支配された。

明治になり甲府城は廢城され、屋形曲輪から山手御門を含む清水曲輪にかけての北側大部分は甲府駅や中央線の線路として破壊され、西側の楽屋曲輪は勤業試験場、甲府中学となり以後山梨県庁として利用され、現在は中央から東と南が公園として利用されている。



番号	位 置	主な検出遺構	番号	位 置	主な検出遺構	番号	位 置	主な検出遺構
1	北口2丁目170-7	石垣、網木	19	北口2丁目169	二の堀、ピット、溝	37	丸の内1丁目505-1	上水木樋、土坑、溝
2	北口2丁目181-1号他	井戸、溝、石列等	20	北口2丁目24	溝、ピット	38	丸の内2丁目31-9	溝、石列、土坑
3	北口2丁目181号他	二の堀、土塁	21	北口2丁目14	溝、ピット	39	武田1丁目111他	三の堀
4	丸の内1丁目49-1番	石垣、曲輪、井戸	22	北口2丁目93-1番	溝、井戸、ピット、暗渠	40	北口2丁目60	溝、井戸、土坑
5	丸の内1丁目562-2	堀、古墳時代遺物	23	北口2丁目12-1	井戸	41	北口2丁目50他	大型溝、井戸
6	丸の内1丁目578	池、瓦窯跡	24	武田1丁目140	井戸、溝、土坑	42	丸の内2丁目21-2	高塙、井戸、上水木樋
7	丸の内1丁目93	石垣	25	宝1丁目55-1	上水溝	43	朝日2丁目384	—
8	丸の内1丁目240	溝、ピット	26	北口2丁目81	溝	44	丸の内2丁目67	—
9	丸の内1丁目223	池	27	北口2丁目50	溝、土坑、井戸	45	中央1丁目3	堅穴状遺構、溝
10	丸の内2丁目139	裏先手小路	28	北口2丁目129周辺	溝、井戸、土坑、ピット	46	中央1丁目134	ピット、溝
11	丸の内2丁目823他	石垣、土解盛	29	武田2丁目84	溝、ピット、土坑	47	柏生2丁目62他	建物基礎
12	丸の内2丁目126	土坑、溝	30	武田2丁目100	溝(中世)	48	城東2丁目81	土坑
13	丸の内1丁目1-3	溝、ピット、井戸	31	武田2丁目82-3他	埋壙、火災層	49	北口2丁目7-1	土坑、溝
14	丸の内1丁目12-1	井戸、溝、土坑、ピット	32	北口1丁目50-1	井戸、溝	50	北口2丁目172周辺	乾樋石垣、溝、土坑
15	丸の内1丁目12-4	井戸、溝、土坑、ピット	33	朝日2丁目214	土坑、ピット	51	丸の内1丁目	石垣
16	丸の内1丁目1-2	井戸、溝、土坑	34	宝1丁目102	堀	52	丸の内1丁目2-9他	溝、井戸、ピット
17	北口1丁目5	土坑墓	35	丸の内1丁目	土坑、井戸、溝、埋壙	53	中央1丁目188他	二の堀、建物、井戸
18	北口1丁目97	土坑、中世遺物	36	丸の内1丁目108	石垣			

図 1 府城下町遺跡主要調査地点

## 第2章 甲府城山手御門（歴史公園）整備経過

甲府駅周辺新都市拠点整備事業に伴う試掘調査によって、甲府城山手御門一帯の石垣が発見され、当初商業施設建設予定であったものを歴史公園として整備されることとなった。

平成9年の試掘調査で、良好な状態で地中に埋没していた山手御門付近の土橋や清水曲輪の石垣と堀が確認された。歴史研究団体等の保存運動も展開されるようになり、甲府市でも計画の大幅な見直しをすることになった。歴史文化交流の拠点として区域の計画変更を図り、山手御門の復元を主体とした歴史公園を整備することになったのである。

現在、この一帯は都市公園として整備され一般市民や観光客に広く開放されており、山手渡櫓門内には甲府城と甲府城下町の絵図や、当時を物語る発掘調査の出土品などを、展示し、一般に公開されている。

平成 9年 6～8月	・甲府城跡山手門付近試掘調査により、地中に石垣を確認
8月 13日	・市文化財調査審議会から遺構の全面保存・開発凍結等要望
8月 18日	・県文化財審議会史跡部会から遺構の全面保存・開発凍結等要望
8月 26日	・山梨県歴史三団体（山梨県考古学協会、山梨郷土研究会、武田氏研究会）の連名で「甲府城山手門一帯の遺構保存と整備活用を求める要望書」が提出される。
9月 12日	・日本考古学協会埋蔵文化財保護対策委員会より、「山梨県甲府城山手門遺構群の保存に関する要望書」が提出される。
9月 19日	・文化財保存全国協議会より「甲府市甲府城跡の保存と活用についての要望書」が提出される。
平成 10年 11月 9日～	・山手門付近石垣等残存遺構の全体像を検出
平成 11年 1月 8日	・文化庁記念物課坂井秀弥調査官現地視察
12月 8日	・新甲府市総合計画後期基本計画を策定し、30街区山手御門周辺の歴史公園化の推進を決定。
平成 14年 3月	・議会で公園用地取得の補正議案可決
平成 15年 6月	・甲府城山手門一帯整備活用の意見を聞く会（山梨県考古学協会、山梨郷土研究会、武田氏研究会等）
7月 24日	・第1回甲府駅北口、歴史公園整備検討委員会
平成 16年 3月 2日	・第2回甲府駅北口、歴史公園整備検討委員会
5月 18日	・第1回甲府駅北口、歴史公園整備検討委員会専門部会
7月 22日	・第3回甲府駅北口、歴史公園整備検討委員会
7月 27日	・第2回甲府駅北口、歴史公園整備検討委員会専門部会
11月 26日	・第4回甲府駅北口、歴史公園整備検討委員会
12月 21日	・第5回甲府駅北口、歴史公園整備検討委員会
平成 17年 3月 2日	・歴史公園工事着工
6月	・第6回甲府駅北口、歴史公園整備検討委員会
7月 6日	・工事前の発掘調査の新知見により設計変更
10月 31日	・歴史公園完成
平成 19年 3月 15日	・竣工式
3月 28日	・歴史公園一般開放、山手渡櫓門公開開始
4月 1日	

## 第3章 山手御門試掘調査

### 第1節 山手御門調査概要

甲府市丸の内一丁目及び北口二丁目地内における埋蔵文化財発掘調査は、平成9、10、17年の3次にわたり実施され、山手御門一帯の遺構の残存状況を確認した。調査により山手御門部分は削平され遺構は滅失してしまったことが確認されたが、周辺の土橋は幅13m、長さ約23m、土橋東側清水曲輪北面石垣は長さ約15m、土橋西側の清水曲輪北面石垣は長さ24m、清水曲輪東面石垣は南北42m、土橋西側の堀幅約19mなど、石垣ライン・規模等が明確となり、遺構の復元整備が可能となった。

第1次調査は、平成9年6月2日から4日までと同年7月8日から8月31日までの期間にわたり試掘調査を実施し、約560m<sup>2</sup>掘削を行った。地表下約1mと極めて浅い部分から、甲府城清水曲輪東面及び北面石垣の上面一部が確認された。

第2次調査は、第1次調査の結果を受け、石垣の残存状況及び範囲を確認するため、平成10年10月9日から平成11年1月8日まで試掘調査を実施し、1,285m<sup>2</sup>掘削した。その結果、山手御門周辺の清水曲輪東面・北面、土橋部分、山手門東側清水曲輪、土橋北東側堀対岸から石垣が検出された。山手門東側の清水曲輪は搅乱を受け部分的に石垣と胴木が残存するのみであったが、山手門西側の清水曲輪東面は南北42m、北面は東西24mの石垣ラインが確認された。また土橋に関しては、東面は搅乱が著しく、土橋基底部の一部分のみの確認であったが、西面は南北長さ14m、高さ4mが確認され、山手御門周辺の堀及び石垣の位置が明確となった。また土橋北東側堀対岸部分に関しては、近世と近代の石垣が検出された。さらに山手小路と接する土橋の北端部分では、土橋の先端と考えられる東西方向の石垣の一部が検出された。なお山手御門構形虎口前面の山手門が位置していた部分は搅乱が著しく、遺構は検出されなかった。さらに枡形空間及び渡槽門部分は、中央線建設時に削平してしまったことが確認された。

第3次調査は山手御門整備工事に伴う調査であり、平成17年9月14日から11月16日まで3,000m<sup>2</sup>の試掘調査が行われた。調査は、山手御門両側の清水曲輪北面石垣部分を再度掘削した。特に山手門東側は石垣基底部まで掘削を行い、胴木及び堀底の確認が行われている。また山手門西側の清水曲輪北面石垣に関しては、石垣の裏込部分の確認など、より詳細な図面・写真等記録し、山手御門周辺の復元工事の資料となる基礎データの集積を行った。

なお調査は、大型重機及び部分的に人力により掘削し、遺構の確認後測量図を作成した。調査区は地表下0.5~0.6mまでは近代の堆積層であるが、鉄道施設等により搅乱を受けた部分が多くみられた。堀及び石垣はコーラスの堆積が著しく、近代に埋められたことが確認された。

### 第2節 清水曲輪東面石垣

清水曲輪東面石垣は、柳沢文庫所蔵『甲府城絵図』(以後、単に『絵図』とする。)に「是ヨリキタスママテニ拾二間」(約40m)との記載がみられた。石垣は浅い部分では現地表下約1m地点から確認され、ほぼ絵図の数値と合致する南北42mが検出された。北東隅の出隅部分から西側は、90度に曲がり6m確認された。南側の入隅部では高さ5.5mが確認されたが、『絵図』の「石カキ高三丈一尺」の記載から、当初は約9.3mの高さがあったものと推定される。石垣北側の出隅部分は算木積であり、長さ約2mの大型の石材がみられた。石垣は約65度の勾配をもち、安山岩の野面積である。石材の面は幅1.5m前後のもの

が多く、石垣間には約 30 cm の詰石がある。裏込部分は径 10 cm 以上の栗石の露出がみられたが、奥行き等は未確認である。石垣表面には幅約 4 寸 (12cm) の矢穴をもつ石材が 10 石以上確認されている。

清水曲輪東面石垣と土橋間の堀は、東西幅 19m の水堀であったことが確認され、絵図に記載されている「ホリ巾拾一間」(19.8m) とほぼ合致する。堀内の堆積層は、河川等の水底にたまる軟質の黒色粘土層である。さらに堀の南西隅部分周辺からは、厚さ約 1 cm の白漆喰の破片と軒丸瓦など、石垣上に白漆喰の土塼があつたことを裏付ける遺物が検出されている。また 19 世紀代の磁器 2 点が出土した。

### 第 3 節 清水曲輪北面石垣

平成 9 年に実施した試掘調査において、石垣列とその土台となる胴木列が確認できた。東面石垣から土橋までの間約 24m にわたり、確認面からおよそ 4m 下層まで、最大 7 段の石垣が確認できた。ただし、その約西半分は国鉄時代に設置されたコンクリート製の排水橋によって大きく搅乱を受けている。なおこの部分について、「絵図」に石垣上に白い線で「ヘイ十三間四尺」と記載され、調査で確認された約 24m の数値とほぼ合致した。

土橋東側の清水曲輪は搅乱が著しく、部分的に 4 ヶ所の石垣と胴木の痕跡がみられるのみであるが、復元すると石垣は東西 15m あり、出隅部の石垣部分は欠損しているが周辺状況から 98 度の角度で南側へ折れ曲がり、南側へ 11m まで確認された。この部分に関して、寛文 4 年 (1664) 以前の甲府城を描いた「府中城之図」(内閣文庫) によると、土橋から出隅まで「七間半」(約 13.5m) と記載されている。また「東海道諸城図」(池田文庫) では「七間」(約 12.6m)、『絵図』には「石カキ高水上ニテニ丈七尺」(約 8.1m) の記載がみられる。

石垣の積み方は、基底部は布積みを基調とし、中層から上層にかけては布目積みもしくは布目崩しを基調とする。石垣の勾配はおよそ 65 度の勾配で積まれ、上方ではさらに 80 度近くの勾配を探り、反り返るように詰まれている。使用された石の大きさは、石垣露出面で 150cm 前後のものが多いが、200cm を超える大型の石材も使用されている。また、矢穴を残す石材もあり、石垣を積むために切り出した石材が使用されていることが分かる。矢穴の大きさは、台形の幅広部分が約 4 寸 (12cm)、幅狭部分が約 3 寸 (9cm) であり、甲府城の調査事例からほぼ築城期のものと推測される。使用された石材は、自然石の粗割りの後、ハツリ調整が施されているものも確認できた。石材と石材の間には小石を詰め、石垣の安定を図っている。

土橋西側では、湧水が著しく根石及びその下の胴木までは確認できなかった。しかし、土橋東側では比較的乾燥した土壤が堆積し、根石およびその下の胴木も確認できた。検出された状態が乾燥した状態だったため、胴木の大部分は腐敗してその痕跡のみが検出されたものも多い。確認できた胴木は石垣面に直交するように配置されたことが確認できた。また一部には石垣列と平行方向に配置された胴木の痕跡も確認できた。胴木は太さ約 25cm の丸太を、芯一芯で約 80cm 間隔に配置されたものと思われる。

石垣の裏込には「栗石」とよばれる割石が充填されていた。栗石は上層ほど幅広く (約 230cm) 下層ほど幅が狭い (約 100cm) 断面が逆台形を呈していた。栗石のさらに奥は自然堆積層を削り出した痕跡が検出できた。

また、前述したとおり土橋を境に東西で堆積土が異なることがわかった。各種絵図によると例えば青色で表現されるのに対し茶色で表現されるものもある。また「カラホリ」に対し「白堀」と注釈されるものもあり、地点による堀の状況が異なったことも推測される。

山手門の復元にあたって、出土した築城当時の石垣と復元に伴って積み足した石垣との

境には、金属製のプレートを挟み込み、その境界が分かるように配慮した。ただし、現在露出している石垣の大部分は積み足したものである。

#### 第4節 土橋石垣

調査により幅約13m、長さ約23mの規模であることが確認された。土橋東面石垣は攪乱が著しいが基底部は長さ4.3m、現状3段、高さ約1m確認され、径20~80cmの安山岩の自然石による野面積である。

土橋西面は長さ12m確認され、南側約4mの区間は北側より約1m落ち込み、この部分は径30~80cmの自然石による野面積であり、北側は径30~70cmの割石による布目積の2種類の石垣の併用である。石垣基底部には胴木の使用は認められず、黄褐色粘質土の地山層に直接据えられている。土橋石垣には矩反りはみられず急角度で立ち上がり、地表下約0.6m地点で確認された北側上面の石材がほぼ天端に近いものと考えられ、石垣の高さは約4mを測る。土橋両面とも拳大の栗石が少量見られるが、奥行きは0.4~0.5mと薄い。

土橋北側の山手小路との接続部には開口部があり、木橋が存在したものと考えられるが、調査では石垣の一部と推定される径約0.6mの自然石が2点検出された。

出土遺物は軒丸瓦、丸瓦、軒平瓦、桟瓦、輪違い瓦、陶磁器、鉄製楔、鍔、薄板銅製品が出土し、特に山手御門に近い土橋両面堀際から多数検出された。

土橋に関して絵図等の記載から大別して3時期の変遷が確認されている。寛文4年(1664)以前の甲府城を描いた「府中城之図」によると、土橋と山手小路の接続部分には木橋等はみられず、両脇に「二間四方高一間」の石壘状の造構が描かれる。土橋東面の長さは「十二間」(約21.6m)、「高四尺 巾四間」(1.2m 7.2m)の記載みられ、「東海道諸城図」では、「長廿三間 横五間半」(41.4m 9.9m)と描かれ、両絵図には山手門は描かれず、「府中城之図」には竹矢来と考えられる「×」が描かれている。

徳川綱重改修以降の寛文4年から宝永2年(1664~1705)に描かれた絵図「甲州府中城図」(露木家蔵)では、山手小路と土橋接続部は木橋が架かる。さらに土橋中央部に食い違い状の石壘と狭間をもつ土塙が描かれ、さらに舟形虎口前面には山手門が出現する。

18世紀初頭の『絵図』では、土橋中央部の食い違いの石壘はなくなる。土橋東面は「石カキ高九尺」(2.7m)、土橋西面は「石カキ高一丈三尺」(3.9m)と記述され、土橋東側に比べ西側の堀は約1.2m深かったことがわかる。調査により判明した土橋西面の高さとほぼ合致し、切石により再度積み直されていることなどから、柳沢期に改修された石垣であると考えられる。

#### 第5節 土橋北東側対岸石垣

山手小路側の堀に関しては、『絵図』には石壘状に描かれ「是ヨリ西角マテ十一間」(19.8m)、「高六尺」(1.8m)の記載がある。検出された石垣は2時期の変遷がみられた。

第1期の石垣は攪乱のため、石垣基底部の1段目しか残存していないが、南北方向は長さ約8m、北側隅で入隅部が確認され、西側へ延びることが確認された。石垣は、約60cmの自然石を使用し、幅0.6mの栗石が確認された。なお胴木の使用痕跡はなく、黄褐色粘質土の地山層に直接設置されたものと考えられる。石材の一部には幅4cm前後の矢穴を伴うものがみられ、18世紀初頭の柳沢氏により構築された可能性が考えられる。

第2期の石垣は、第1期の石垣の南側で、東西方向長さ4mにわたり確認され、高さは約1.5mを測る。部分的に南側へ約1m延びている。石材は一辺約40cmの間知石が5段確認され、石垣裏側は拳大の礫とコークスが大量に充填されていることから、石垣は明治36年の鉄道開通以降に構築されたものと考えられる。

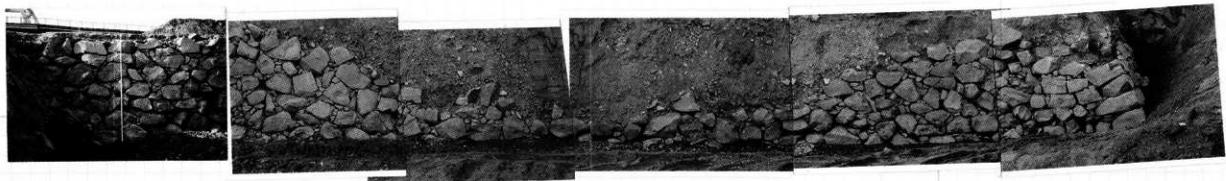
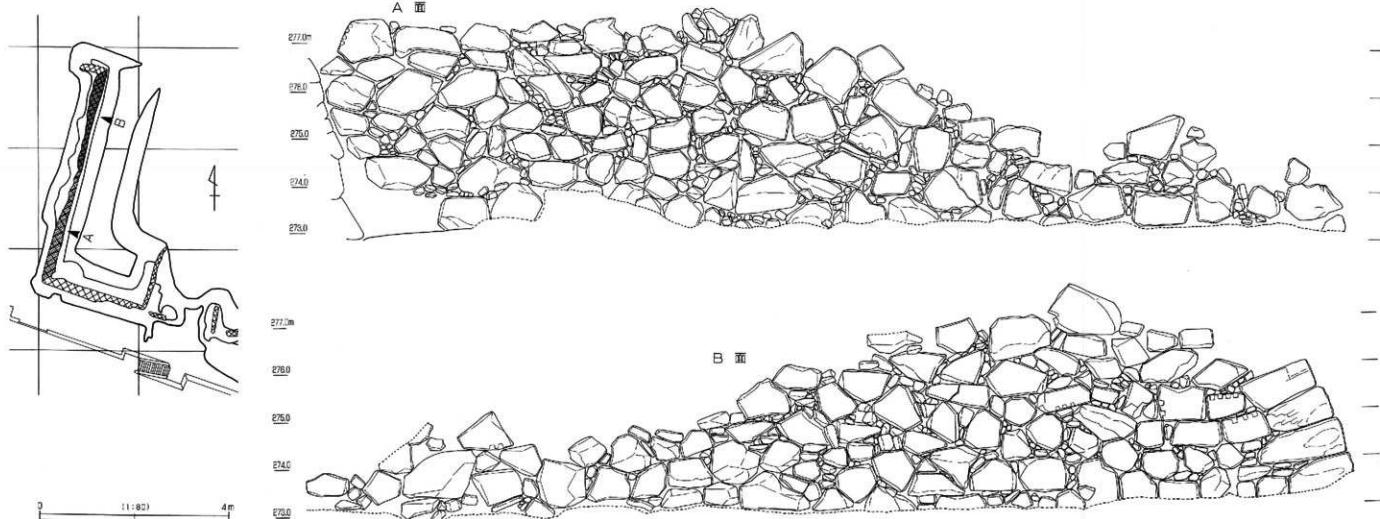


図2 清水曲輪東面石垣側面図

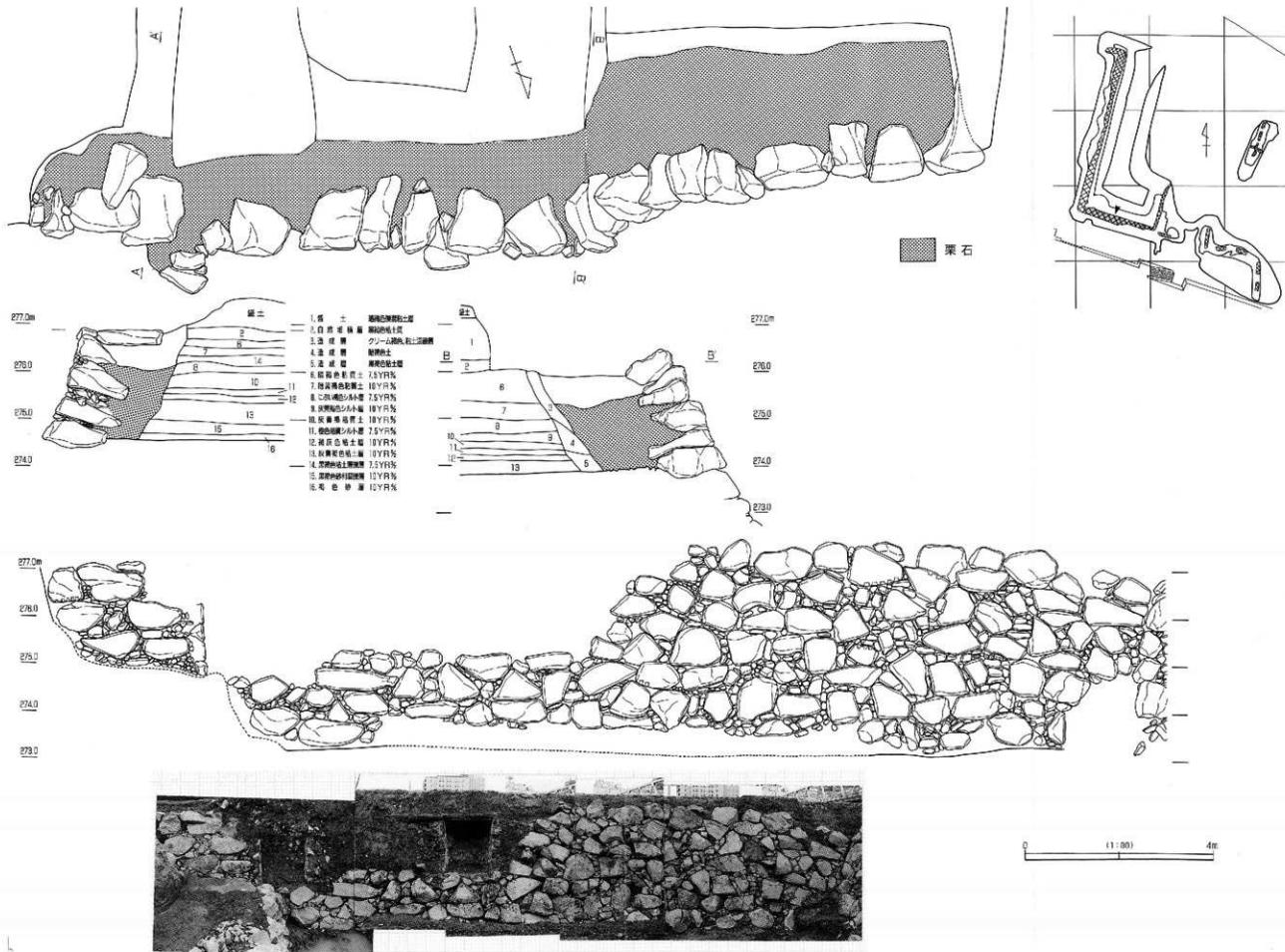


図3 清水曲輪北面石垣平面図、側面図、断面図

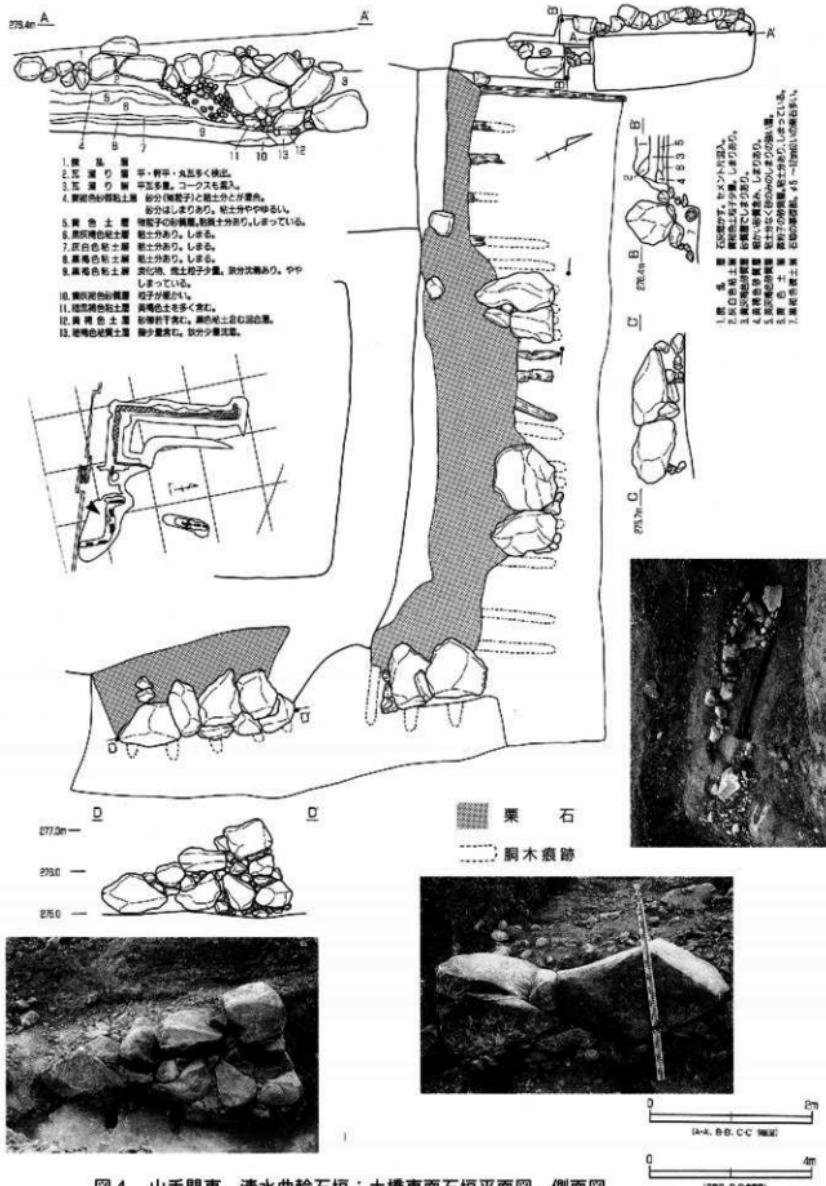
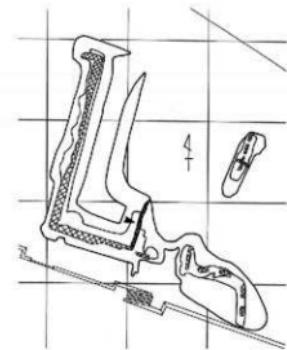
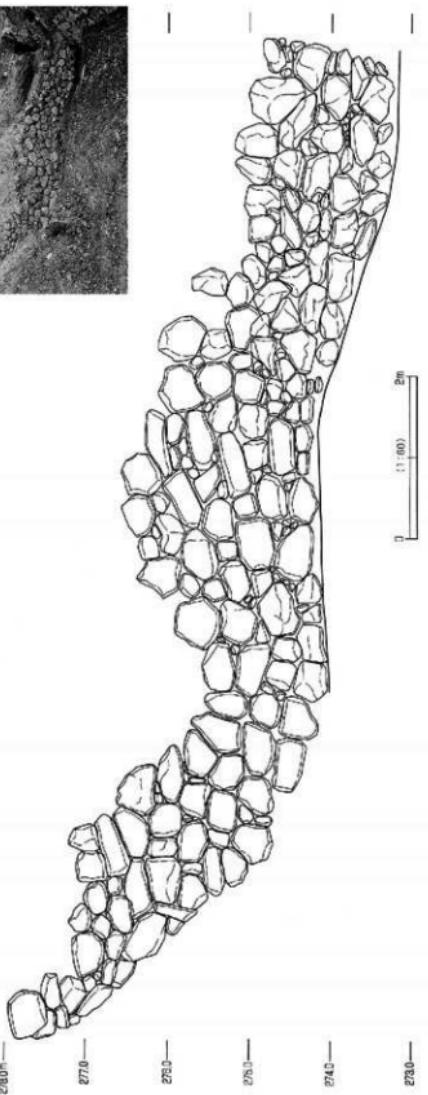


図4 山手門東 清水曲輪石垣：土橋東面石垣平面図、側面図



270—



270—



図5 土橋西面石垣側面図

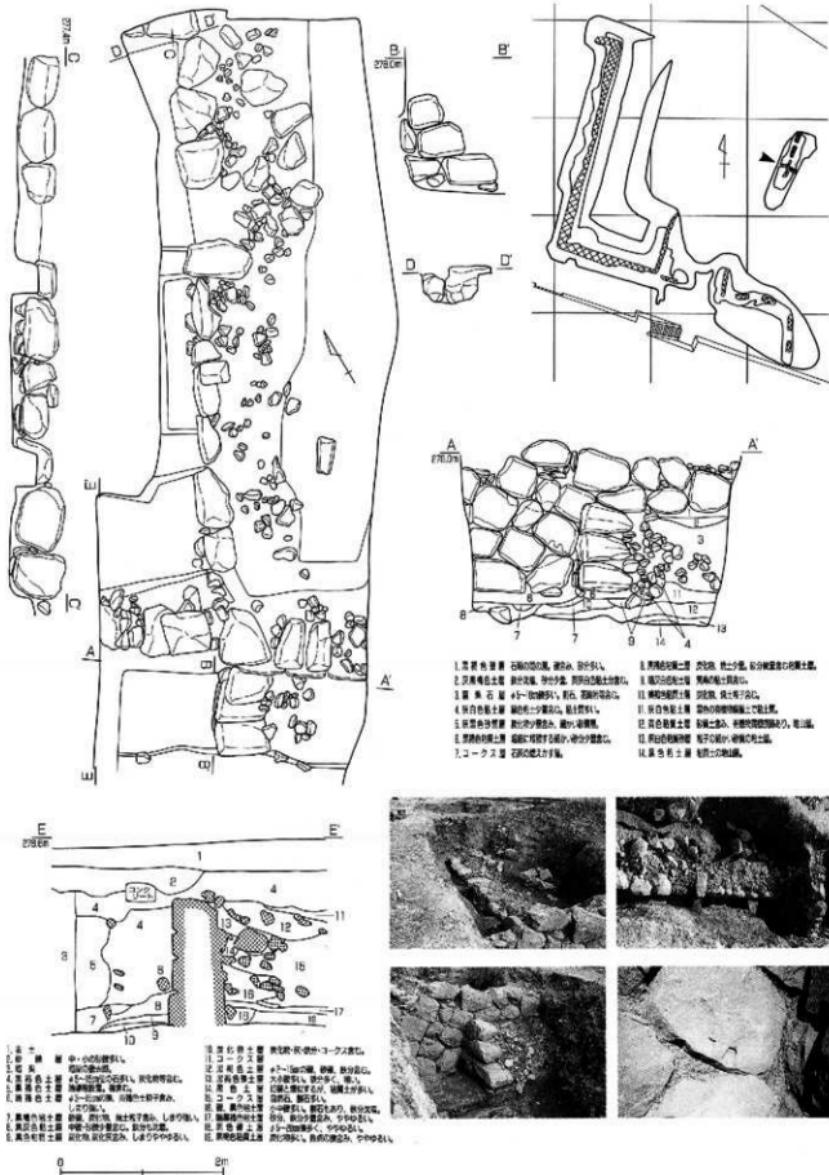
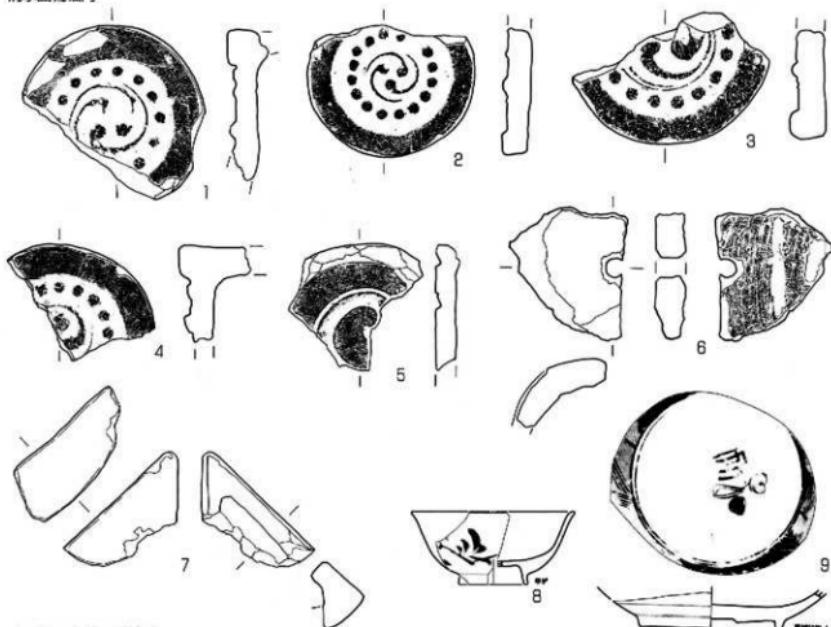


図6 土橋北東側掘削崖石垣平面図、側面図

清水曲輪内



山手御門土橋西側付近

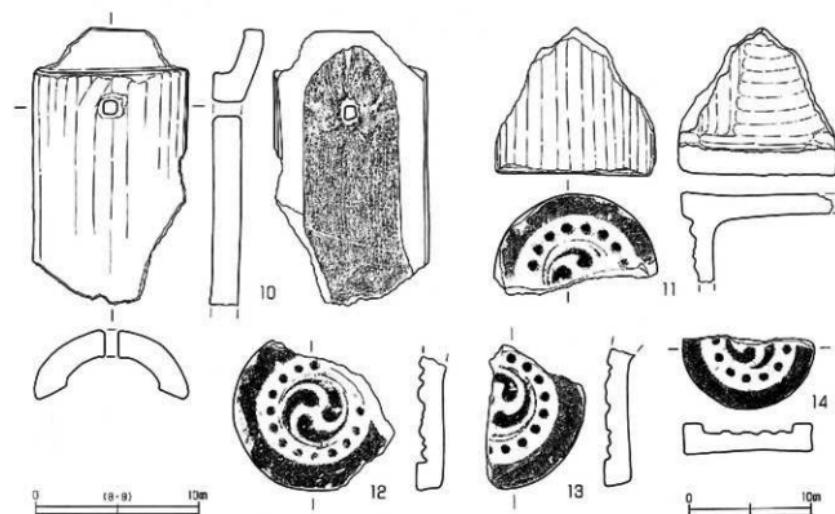
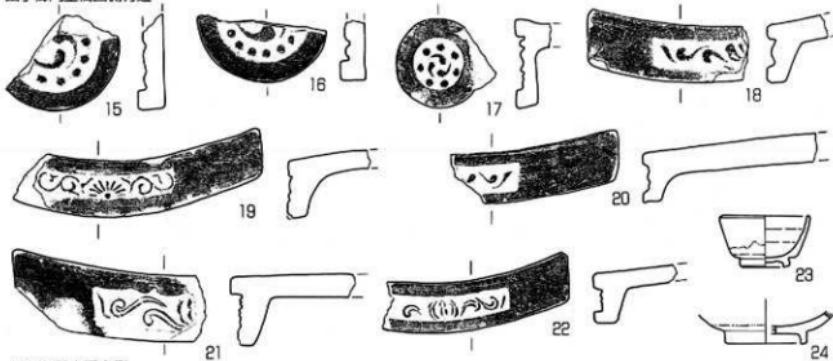
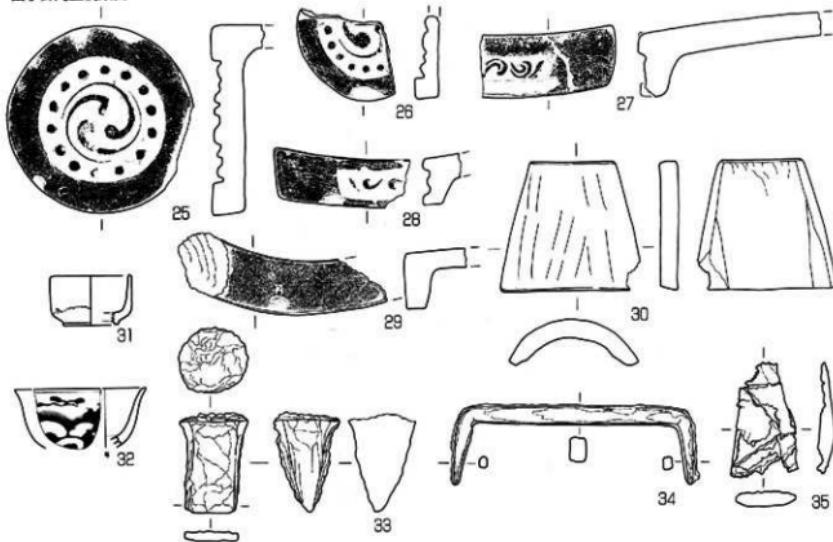


図7 出土遺物 (1)

山手御門土橋西側付近



山手御門土橋東側



土橋北東側対岸石垣付近

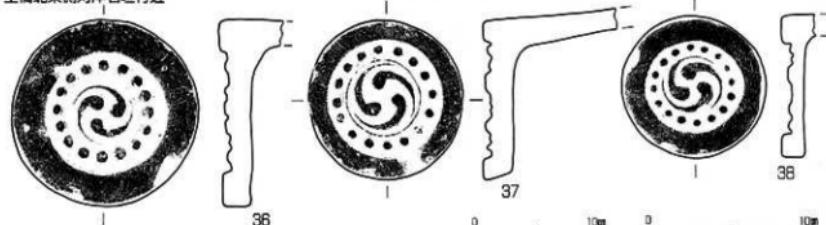


図8 出土遺物 (2)

0 10cm  
(29・34・31・36)

## 出土遺物観察表

単位: cm

図版No.	出土位置	種類	群形	長さ・径	幅	厚さ	高さ	器高	文様区画幅	連珠数	三巴	備考
1	清水曲輪内	瓦	軒丸瓦	15.3		2.5	10.3	2.3		(9)	左	
2	清水曲輪内	瓦	軒丸瓦	13.7			9.6	2.2		(15)	左	
3	清水曲輪内	瓦	軒丸瓦	(9.0)			(6.4)	3.0		(8)	左	
4	清水曲輪内	瓦	軒丸瓦	(8.0)		2.3	(4.7)	2.7		(6)	左	
5	清水曲輪内	瓦	筋り瓦	(6.6)		2.6						
6	清水曲輪内	瓦	丸瓦	(9.5)	(9.5)	2.3						
7	清水曲輪内	瓦	隅丸瓦		口盤(9.8)	底径 4.0						
8	清水曲輪内	磁器	皿				4.5					
9	清水曲輪内	磁器	丸瓦	(22.5)		底径 8.4	(2.6)					
10	土塗西側付近	瓦	軒丸瓦	12.5		2.2	5.7		3.5			
11	土塗西側付近	瓦	軒丸瓦	13.3			9.5	2.5		(8)	左	
12	土塗西側付近	瓦	軒丸瓦	13.2			(9.0)	2.2		(14)	左	
13	土塗西側付近	瓦	軒丸瓦	(13.5)			(5.0)	2.1		(9)	左	
14	土塗西側付近	瓦	軒丸瓦	10.5			7.3	2.3		(7)	右	
15	土塗西側付近	瓦	軒丸瓦	(5.9)			(4.4)	2.1		(5)	右	
16	土塗西側付近	瓦	軒丸瓦	(4.7)			(3.0)	2.0		(6)	右	
17	土塗西側付近	瓦	軒瓦	7.4			4.0	1.8		7	左	
18	土塗西側付近	瓦	軒平瓦	(4.5)	(13.1)	1.9						
19	土塗西側付近	瓦	軒平瓦	(6.5)	(20.0)	1.7						
20	土塗西側付近	瓦	軒平瓦	(14.4)	(13.7)	2.1						
21	土塗西側付近	瓦	軒平瓦	(10.2)	(15.5)	1.8						
22	土塗西側付近	瓦	軒平瓦	(14.5)	1.5							
23	土塗西側付近	陶器	碗	口盤(5.5)	底径 2.8	3.1						
24	土塗西側付近	陶器	碗	底径 5.0								
25	土塗東側付近	瓦	軒丸瓦	15.4		(2.0)						
26	土塗東側付近	瓦	軒丸瓦	(6.5)			5.0					
27	土塗東側付近	瓦	軒平瓦	(16.4)	(11.2)	2.0						
28	土塗東側付近	瓦	軒平瓦	(3.5)	(11.0)	2.0						
29	土塗東側付近	瓦	輪裏平瓦	(5.0)	(11.5)	1.6						
30	土塗東側付近	瓦	輪裏平瓦	10.5	上7.0	下11.0	1.4					
31	土塗東側付近	陶器	小型碗	口径(5.0)	底径 (3.4)	(3.0)						
32	土塗東側付近	磁器	杯	口径(7.9)		(3.7)						
33	土塗東側付近	鉄製品	クサビ	6.0	2.5		上3.0~ 下0.9					
34	土塗東側付近	鉄製品	かすがい	14.5	1.1	太15.0 ~細0.5	4.9					
35	土塗東側付近	鉄製品	鍔板	15.0		2.1						
36	土塗東側付近	瓦	軒丸瓦	13.0		1.6		100	2.4	(16)	左	
37	土塗東側付近	瓦	軒丸瓦	11.5		1.7		95	1.8	(16)	右	
38	土塗東側付近	瓦							75			

## 第4章 山手御門（歴史公園）復元整備工事

### 第1節 事業の体制

整備事業にあたり、事業の主体は甲府市都市建設部甲府駅周辺拠点整備課が行い、発掘調査及びこれに伴う歴史的調査は甲府市教育委員会文化振興課文化財係が担当した。事業の進行に合わせ甲府駅北口歴史公園整備検討委員会が設けられ、これを主たる助言機関として事業が進められた。

指導・助言 文化庁、山梨県教育委員会学術文化財課

甲府駅北口歴史公園整備検討委員会（学識経験者）

清雲俊元（山梨郷土研究会理事長）

谷口一夫（山梨県考古学協会会長）

萩原三雄（山梨文化財研究所所長・甲府市文化財調査審議会会長）

渡辺洋子（芝浦工業大学教授）

土谷芳英（山梨県建築士会副会長）

甲府駅北口歴史公園整備検討委員会専門部会（上記委員を除く）

八巻與志夫（山梨県埋蔵文化財センター）

山田 宏（山梨県狭中地域振興局）

事業主体 甲府市

発注 甲府市都市建設部都市拠点整備室甲府駅周辺拠点整備課

設計監理 株式会社文化財保存計画協会

施工 国際建設・コミヤマ工業・進藤建設JV

事業名 甲府駅周辺拠点形成事業

工事名 甲府市歴史公園築造工事

工期 平成17年6月13日～平成19年3月15日

規模 敷地面積 6,039 m<sup>2</sup>

項目 石垣石積み工事

山手渡橋門復元 木造2階建

山手門復元 木造平屋建

土堀復元 木造 延長69.0m

### 第2節 整備基本方針

山手御門の一帯を歴史公園として整備する基本的な考え方として、①都市公園としての整備、②史実に基づく山手御門の復元、③残存遺構の埋設による完全保存、④市民の憩いの場の創設、⑤歴史学習の施設としての山手渡橋門の公開と活用、⑥観光起点としての歴史公園整備がある。

甲府のまちの中にあって地中に忘れ失われていた歴史性を復活させ再現するとともに、歴史を活かしたまちづくりの拠点となることを目的とする。

### 第3節 復元工事の基準

甲府城は文禄2年（1593）から城主となった浅野長政・幸長の時代に、一応の完成を見たと伝えられる。その後、徳川一門による数回の変遷の後、宝永元年（1704）柳沢吉保が甲府城主になった。吉保は城内の大改修を行って、楽屋曲輪や屋形曲輪の殿舎建築を整え、雄大で壯麗な甲府城になったといわれている。建築物の復元については、江戸時代中期柳

沢時代を復元対象とした。この18世紀前半には甲府藩が置かれており、吉保の子吉里は唯一甲府城主として在城した。また、藩の公式記録として信憑性の高い各種絵図が描かれただけでなく文字資料などの情報量も格段に多いことによる。

石垣の復元整備については、築城期の石垣とした。発掘調査の結果では、築城当初の慶長期と推定される清水曲輪一帯の石垣と、江戸時代中期と推定される整形された土橋の石垣の2時期が見られるが、築城期を復元対象とした。

なお、整備の基準尺度は、石垣や柳形虎口と山手門、山手渡櫓門も含め1間を6尺5寸(1.970m)とし、石垣上に乗る堀のみ発掘調査の計測値から6尺3寸(1.909m)とした。

山手御門の復元に当たっては、県史跡「甲府城跡」の整備との整合性も考慮している。

#### 第4節 山手門の復元

甲府城の出入口は、南側の追手（大手）御門、西側の柳御門、北側の山手御門の三箇所がある。城郭の主要な虎口では、石垣等で囲まれた柳形を築き、外側に高麗門、内側に櫓門を設けるのが正式である。現在遺構としては残っていないが、甲府城には三箇所の虎口が存在した。絵図に描かれた追手虎口と明治期の実測図（「甲府城追手門実測図」）及び古写真（「甲府本城表門」石黒章敬氏所蔵）を比較すると、追手柳形の形態は、外側の門の左右に低い石垣とその上に土塙が建っており、入って左側に櫓門が建つ構成であったことが確認できる。このことから他の2つの虎口も追手門同様に各種絵図に描かれている柳形を構成していたと考えられる。よって、山手門は高麗門形式の門とする。

山手門の構造は、木造平屋建高麗門、切妻造本瓦葺、袖土壁付、門桁行14.4尺、控桁行9.5尺。追手高麗門は、実測図及び諸絵図から得られる情報と古写真から、鏡柱の上に冠木を載せた古式の高麗門と判断されるため、山手門も追手門と同様に古式の高麗門とした。屋根は切妻本瓦葺、棟の熨斗瓦は、平熨斗ではなく輪違い、軒先は漆喰塗込みで垂木は波型、屋根勾配は6寸勾配とした。

山手門は、発掘調査で礎石や袖石垣の遺構が検出されなかったため、「絵図」等の資料を参考に位置と規模を決めた。「甲府城絵図」（甲州文庫、山梨県立博物館）山手門の記述では、「開キ間口一丈八尺四寸」とあることから、この寸法を鏡柱内々の寸法とした。

鏡柱と冠木はケヤキ材とし、控柱はヒバ材で施工した。

#### 第5節 山手渡櫓門の復元

山手御門虎口の第二の門は、絵図に描かれた姿図から櫓門である。「甲府城絵図」（甲州文庫、山梨県立博物館）では、姿図は描かれていないが絵図内に書き込まれた記述に「山手渡櫓 梁間三間 桁行七間」とある。また、「絵図」には、やはり平面図ながらこの部分の表現が、虎口石垣に渡すように上に描かれていることから渡櫓形式の門とした。

復元した山手御門虎口の天端間距離は、41尺7寸となり、ここに櫓を渡すとこれ以上の寸法が必要となるため、7間でも掛かりの部分がやや少な目ではあるが渡すことが可能である。1階は桁行5間、梁間2間、2階は桁行7間、梁間3間、軒高29.1尺、棟高37.95尺とする。

山手渡櫓門は、木造2階建櫓門で入母屋造本瓦葺、外部大壁白漆喰塗、内部竪板張である。1階の柱位置は、すでに礎石のあった位置が削平を受けていたため、追手御門の実測図と現存する鉄門礎石を参考に復元した。

冠木と鏡柱はケヤキ材、門扉はヒノキ材とヒバ材、梁はマツ材を主に用いた。

## 第6節 土塙の復元

山手御門虎口石垣の上には、塀が廻されていたことが諸絵図に描かれている。塀の長さの記載はあるが、形式・高さ・仕様など詳細は書かれていないため、追手御門の古写真と実測図を参考に復元した。

追手虎口表門袖石垣上の土塙の柱間が 5.0 尺で割り付けていることから、山手門袖石垣上の土塙の柱は、石垣の長さから中央柱 1 本が適当とし、柱間を 5 尺 3 寸とした。屋根は切妻本瓦葺、外壁は漆喰塗り、銃眼・矢狭間を設けず、柱に腕木を通し出桁を受け、垂木を渡し屋根をかける構造である。表門に取り付く土塙は控柱を持った例が多いことから、控柱を持った土塙とした。控柱の位置は、袖石垣の奥行きがあまりないことから、芯柱から 4.0 尺程度の位置に設ける。柱と控柱は 2 段の貫で繋結する。この構造は高石垣土塙も同様とする。高石垣上の土塙は、壁は漆喰塗り、1 区画に対し 1 箇所の銃眼を設ける。銃眼・矢狭間は長方形、小さな正方形、三角形の形状があることが古写真で確認できることからこれに倣って配列した。土塙の木材は、耐久性を考慮して柱はヒバ材、控柱は栗材とした。

## 第7節 虎口と石垣の復元

石垣の整備範囲は、原則として建築工事に係る最小限の範囲を虎口石垣整備範囲とした。石垣の積み方は、粗割石や自然石を用いた石積みとし、裏込、裏盛土においても栗石、良質粘性土による舞鶴城公園石垣修理と同様の工法とした。ただし、この工法を施工する面積が確保できなかった部分については、裏込内にジオテキスタイルを敷き込んでいる。また、線路に面した石垣は当時なかったものであるが、新たに石垣を積み歴史公園としての景観を整えた。

山手門の東と西の北面する石垣の復元は、検出された残存石垣の上に新たな石積みを施工したが、これに続く清水曲輪の東面と北面の石垣及び土橋石垣は、盛土による養生を行って芝張りとした。

## 第8節 山手御門の一般開放

山手御門虎口については、堀面の石垣遺構を数箇所検出しているものの、櫓門礎石、虎口内石垣根石等の遺構はなく、現存遺構からの復元は難しい。そこで『絵図』に記載された塀の長さから、虎口の拝形を形成する石垣の位置を特定した。

堀面の石垣勾配は、陸軍が測量実測した「日本城郭史料集」第 12 卷に稲荷曲輪堀面石垣の断面寸法が記載されている。この石垣が山手門東面まで連続することから、同じ勾配と考えて 4 寸 5 分勾配とした。

山手門、山手渡櫓門は施錠せず歴史公園の一部として終日開放している。山手渡櫓門の 2 階は、甲府城と甲府城下町の概要を紹介する学習施設として一般に公開している。甲府城や甲府城下町を描いた絵図の複製、山手御門の整備工事過程を示すビデオ設備、山手渡櫓門の復元模型、鰯瓦の複製、甲府城跡出土の瓦や武家屋敷における発掘調査によって出土した陶磁器類の展示がある。また、2 階を通り抜け南側の石垣の上に出ると、南に甲府城の本丸や稲荷櫓と富士山の眺望が望め、甲府駅に停車する電車とプラットホームや線路も見下ろすことができる。

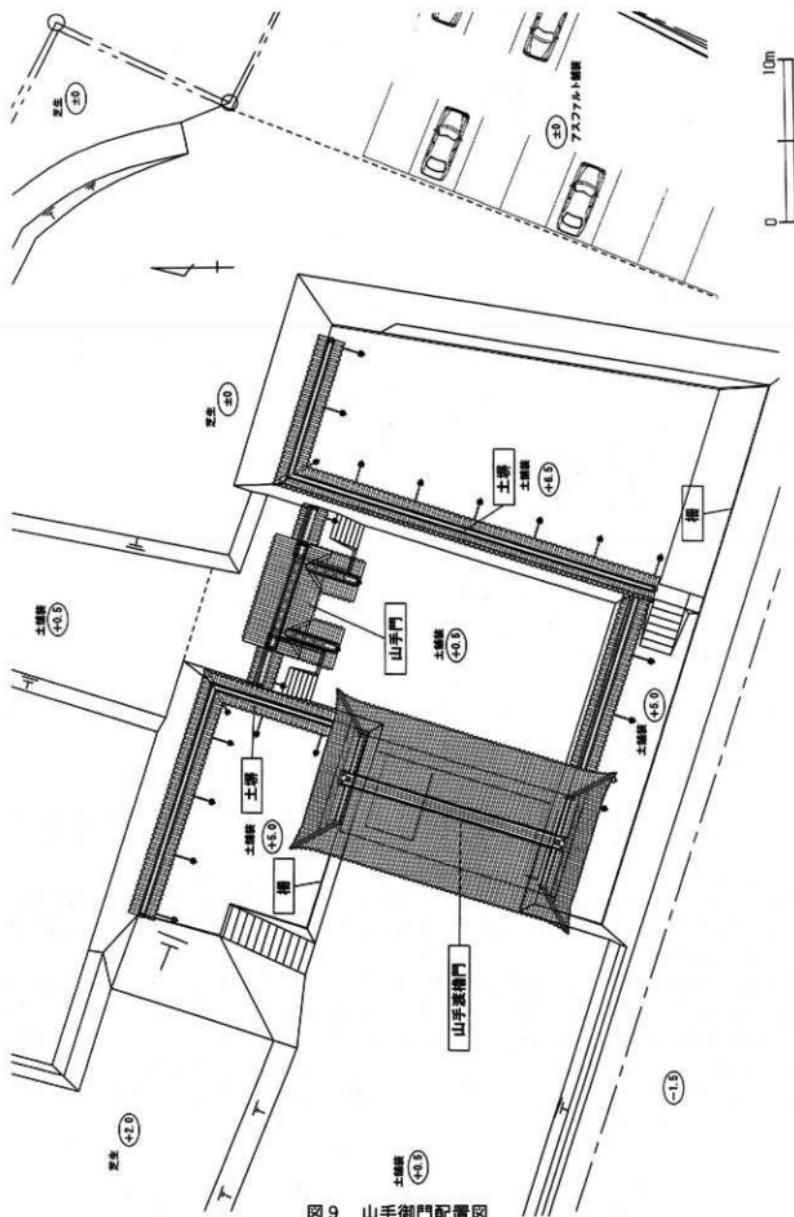
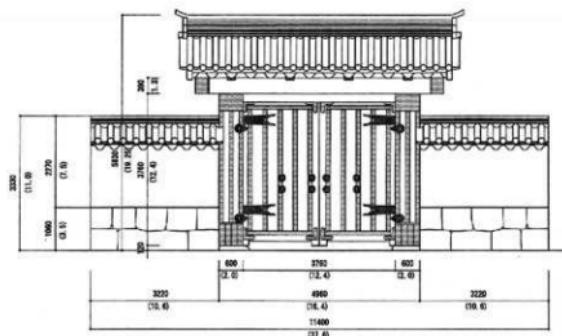
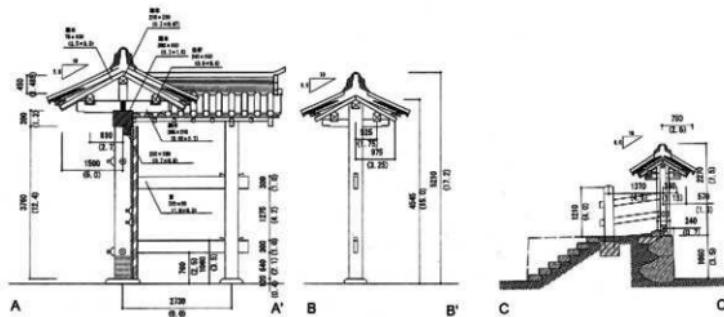


図9 山手御門配置図



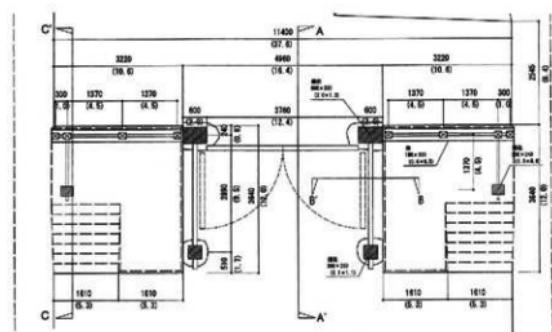
山手門 立面図



A-A'断面図(門扉部)

B-B'断面図(笠板部)

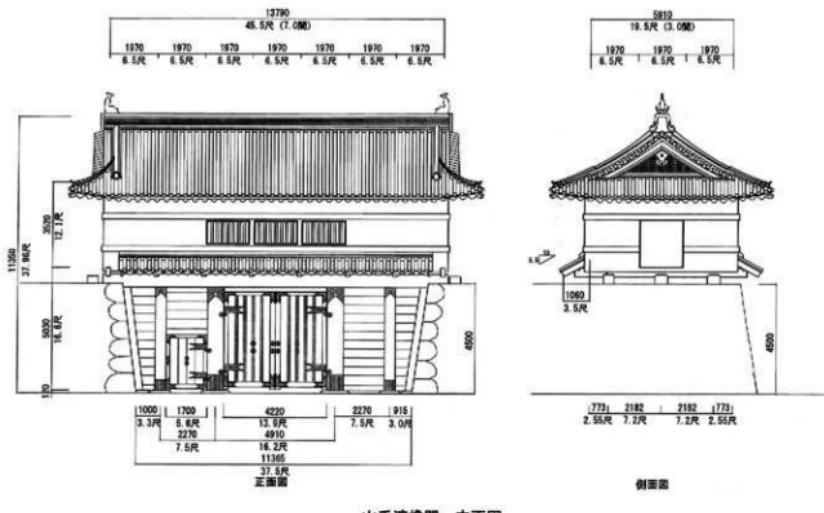
C-C'断面図(築土堤部)



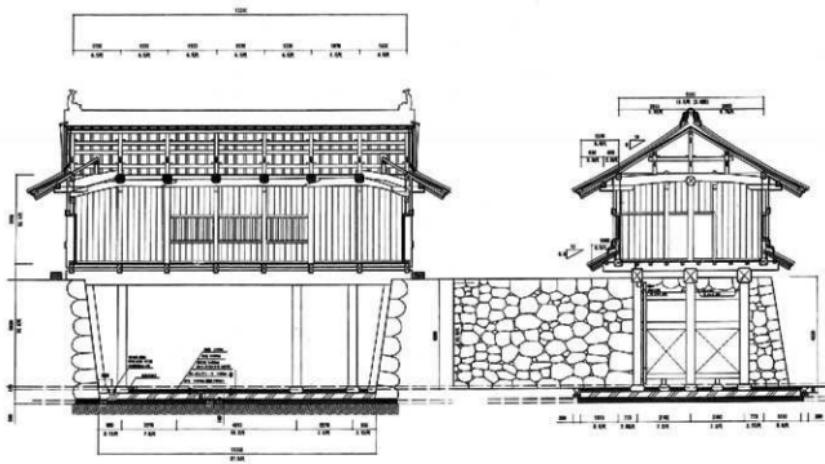
山手門 平面図

図10 山手門・築土堤平面図、立面図、断面図

0 4m



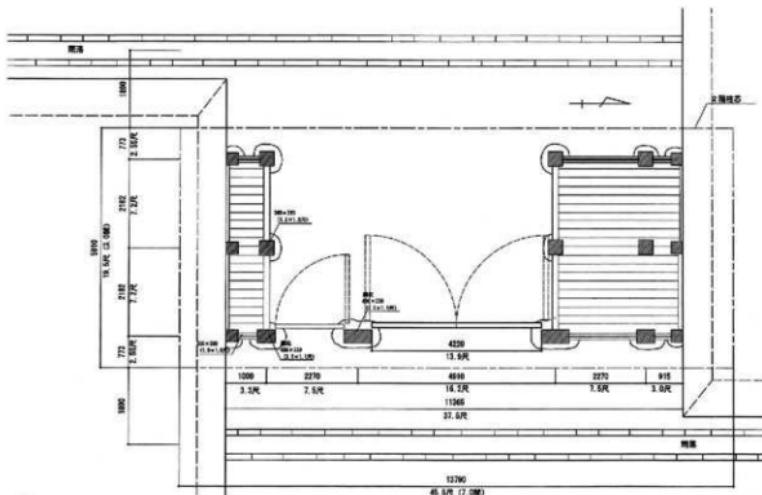
山手渡櫓門 立面図



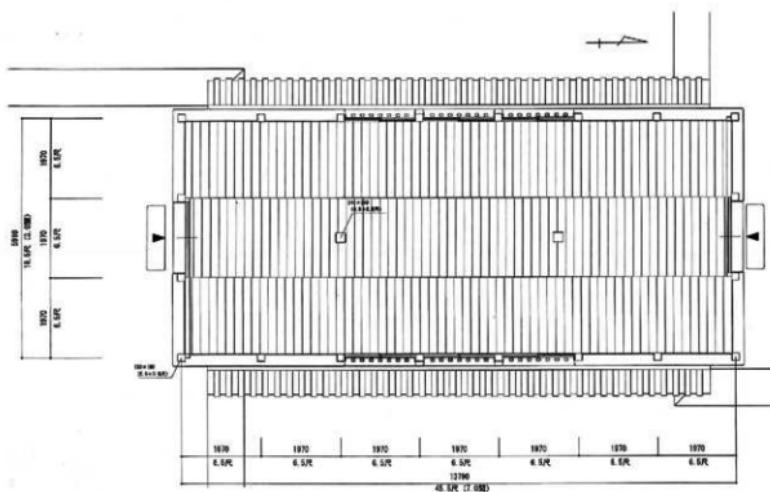
山手渡櫓門 断面図

0 4m

図11 山手渡櫓門立面図、断面図



山手渡櫓門 1階平面図



山手渡櫓門 2階平面図



図12 山手渡櫓門 1階・2階平面図

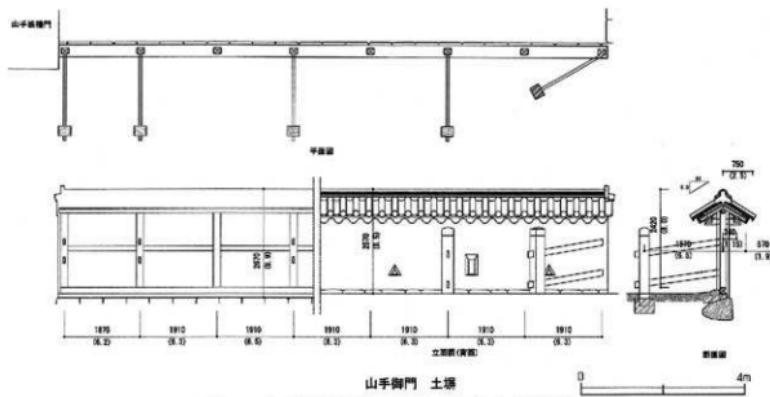


図13 山手御門 土塁

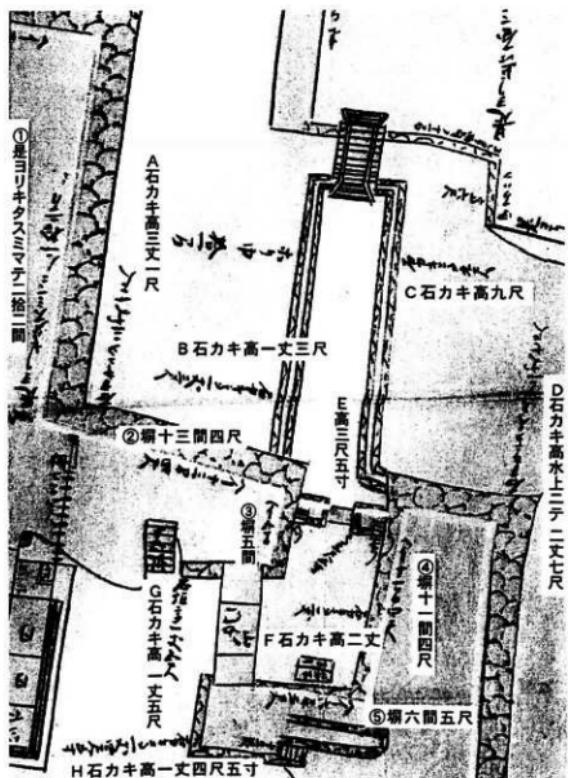


図14 甲府城内絵図「楽只堂年録」第173巻（山手御門部分）

番号	記述	1間=6尺3寸換算	m換算
①	二拾二間	138.6尺	42.0m
②	十三間四尺	85.9尺	26.0m
③	五間	31.5尺	9.5m
④	十一間四尺	73.3尺	22.2m
⑤	六間五尺	42.8尺	13.0m



甲府城跡山手御門調査区全景



清水曲輪東面・北面石垣



清水曲輪東面石垣



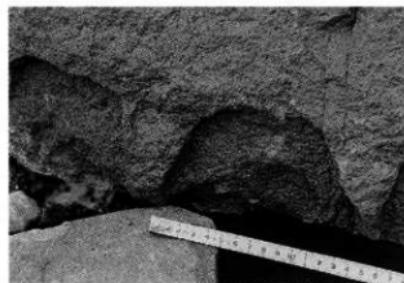
山手門西清水曲輪北面・土橋西面石垣



山手門東清水曲輪石垣



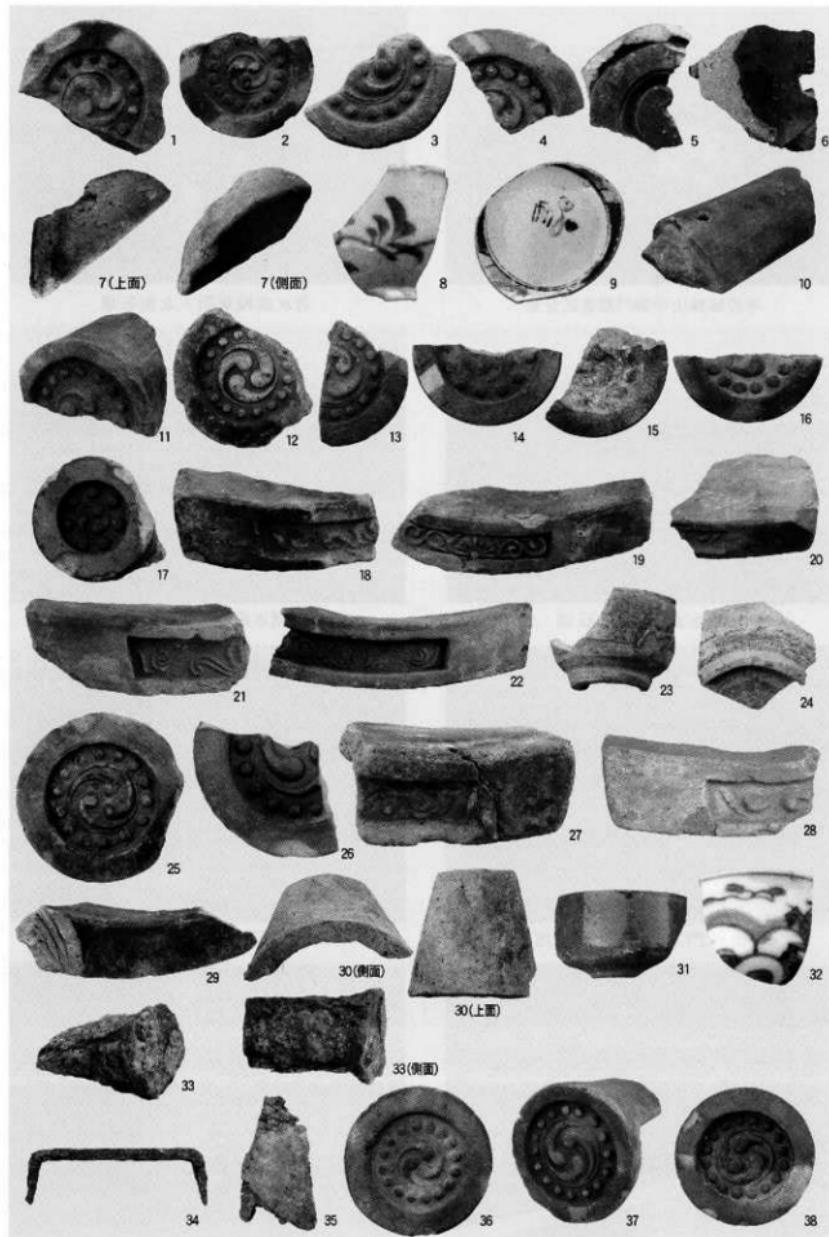
山手門西清水曲輪北面石垣断面



矢穴跡



土橋北東側堀対岸石垣





歴史公園全景



山手御門桥形虎口



堀整備状況



石垣養生状況



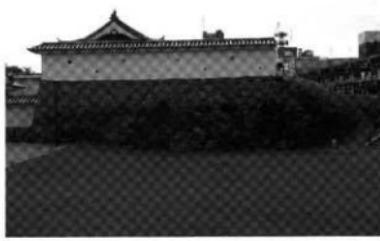
山手門外側



山手門内側



山手門東側北面石垣・高土堀整備状況



山手門西側北面石垣・高土堀整備状況



南面の石垣



山手渡櫓門内側(西面)



山手渡櫓門虎口



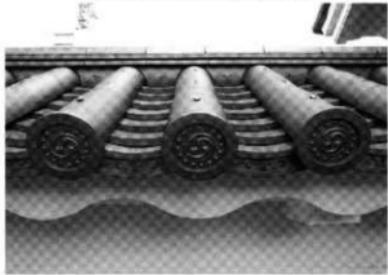
山手渡櫓門東面軒



山手門東面石垣整備状況



虎口東の高土塹内側整備状況



軒平瓦・軒丸瓦の復元



山手渡櫓門棟上の鰐瓦

## 報告書抄録

ふりがな	こうふじょうあとやまとてごもん			
書名	甲府城跡山手御門			
副題	甲府市歴史公園山手御門埋蔵文化財の試掘調査・発掘調査・整備報告書			
シリーズ名	甲府市文化財調査報告 50			
著者名	望月祐仁・志村憲一・平塚洋一			
発行者	甲府市教育委員会			
編集機関	甲府市教育委員会文化振興課			
所在地	〒400-0865 山梨県甲府市丸の内一丁目 18-1			
電話・FAX	電話 055-223-7324 FAX055-226-4889			
E-mail	kyobun@city.kofu.lg.jp			
発行日	平成 22 年 (2010) 3 月 31 日			
所在地	コード		位 置	
	市町村	遺跡番号	世界測地系	緯度経度
山梨県甲府市 丸の内一丁目・ 北口二丁目	19201	115	X=-36907.554m Y=6426.370m	緯度 35° 40' 2.4" 経度 138° 34' 15.5"
調査概要	調査期間		調査面積	調査担当者
	第1次調査 平成 9 年 6 月 2 日 ～8 月 31 日		560 m <sup>2</sup>	志村憲一 ・伊藤正彦
	第2次調査 平成 10 年 10 月 9 日 ～平成 11 年 1 月 8 日		1,285 m <sup>2</sup>	石垣等の全容を確認するため
	第3次調査 平成 17 年 9 月 14 日 ～11 月 16 日		3,000 m <sup>2</sup>	復元整備のための事前調査
遺跡概要	所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構
	甲府城跡	城郭	中世～近世 ・近現代	石垣・胴木 瓦、陶磁器、金属製品

### 甲府市文化財調査報告 50

## 甲 府 城 跡 山 手 御 門

—甲府市歴史公園山手御門埋蔵文化財の試掘調査・発掘調査・整備報告書—

平成 22 年 3 月 31 日発行

発行 甲府市教育委員会

〒400-8585 山梨県甲府市丸の内一丁目 18 番 1 号

印 刷 諸内田印刷所

〒400-0032 山梨県甲府市中央二丁目 10 番 18 号

